生徒の活動を評価するための社会科授業
～「知」をはかる評価を目指して～

社会科　吉田裕亮　南岡俊之　吉田昂平

１．主題設定の理由

平成27年8月に提出された中教審教育課程企画特別部会の論点整理では，特にこれからの時代に求められる資質・能力として『様々な情報や出来事を受け止め，主体的に判断しながら，自分を社会の中でどのように位置付け，社会をどう描くかを考え，他者と一緒に生き，課題を解決していくための力が必要となる。主権を有し，今後の我が国の在り方に責任を有する国民の一人として，また，多様な個性・能力を生かして活躍する自立した人間として，こうした力を身に付け，適切な判断・意思決定や公正な世論の形成，政治参加や社会参画，一層多様性が高まる社会における自立と共生に向けた行動を取っていくこと』を掲げている。さらに社会・地理歴史・公民科で見直される項目として，『主体的に社会の形成に参画しようとする態度等の育成や，資料から読み取った情報を基にして社会的事象について考察し表現すること』を掲げている。これは言うまでもなく，旧態依然とした「知識注入型」「一斉授業型」の授業からの完全なる脱却をめざし，課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び，いわゆるアクティブ・ラーニングをさらに推進させようとする意志の表れであろう。

池田キャンパスにおける共同研究では，三年間にわたり「つながり，かさなり，ひろがる授業」をテーマに掲げ，子どもたちの「知」についてこだわった研究を続けてきた。社会・地理歴史・公民科部会では「知」とは社会科的思考力であるとし，さらに我々中学校社会科では「知」とは「具体的に社会を意識し，善良な市民としての資質を理解する」ことと定義づけた。また，研究の最終年次である今年度は，「知」をはかる評価について深く考察した。中教審の論点整理で述べられる以前にも，中学校社会科ではアクティブ・ラーニングの重要性を深く認識しており，各授業において実践を行ってきた。その中で議題に挙がった内容として，アクティブ・ラーニングの評価において成果物から学習効果をいかに見とるか，という点がある。こちらの意図が生徒個人に落とし込まれているか，そしてそれを個人が適切な方法で表現しているか，などを教員が把握して評価しなければならない。11月に行われた研究発表会では，学校図書館とのコラボレーションを行い，複数の教員が多面的な視野（社会科教育の専門家に加え，メディアスペシャリストとしての図書館職員）で授業デザインそのもの，そして成果物の評価を行った。しかしながら毎回の授業でこのような体制を構築することは物理的な困難を伴う。よって今年度は，いかに生徒の「知」を通常のカリキュラムの中で見とるか，に重点を置いた授業構築を意識した。以下に実践例を示す。

２．実践の概要

【実践事例１】歴史的分野

（１）題材

「冷戦期を振り返る」

～ベトナム戦争からのメッセージ～

（２）単元の目標

ベトナム戦争を通じて，それらの構造と現在に至るまでの人類社会に与えた影響について理解し，進んで平和のために行動する決意を持つことが出来る。

（３）学習内容

歴史を学習する大きな意義として，過去の過ちについて学習してそれを未来への警鐘とする，ということがあろう。たとえこれまでの人類がなしえなかったことも，過去を学んだ未来の人々が，必ずや実現して素晴らしい未来を築いてくれるだろうとの願いを込めて。しかしながら二度の世界大戦を人類は経験した。戦争を終わらせるための戦争，国家指導者たちは第一次大戦をそう呼んだが，結局人類は平和を希求していたはずであるのに，第二次大戦へと突入した。終結後すぐに二大大国がイデオロギーの違いから対立し，世界中の国をまたもや巻き込んで緊張状態を作り出した冷戦が発生。全面戦争はなかったものの，各地で当該国国民を巻き込んだ代理戦争が多発した。ここに至るまでの惨禍はもちろん言うまでも無いが，では冷戦が終結してから20年以上が経過した現在，世界は平和になったのであろうか。テロの惨禍や加速する格差社会を例に出すまでも無く，世界中が平和を享受するにはほど遠いのが現状である。とはいえ我々は教育者として，平和な社会を造りあげていく良き公民を育てなければならない。そのためにこの授業を設定した。

よりよい未来を築くための力として第一に，「整理され，時系列がはっきりした知識の獲得」を挙げる。特に近現代の歴史は複雑化しており，生徒達の理解が浅くなっている現状がある。今回は図書館の力も借りながら，冷戦期の地域紛争に大国が介入したベトナム戦争についての情報の可視化，ビジュアル化を重点的に取り組ませる。また教科を超えた永続的な理解を獲得させるためのパフォーマンス課題として，『ベトナム戦争の写真を撮影したジャーナリストになりきり，中立の立場でベトナム戦争を振り返るエッセイを書け』『戦争を容認できない理由を述べよ』という課題を設定する。この課題を通じて第二の力，「様々な事象に対し，様々な角度から観察できており，それを好ましい形で表現できる」が身についたかを評価する。

①評価規準表

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
ベトナム戦争がもたらしたものについて，関心を持って意欲的に追求している。	ベトナム戦争がもたらしたものについて当時の状況を踏まえつつ，多面的・多角的に考察し，それを適切に表現している。	資料からベトナム戦争について読み取ったりまとめたりしている。	ベトナム戦争が我が国や世界に与えた影響について理解している。

②本時の目標

・当時の社会情勢，ベトナム戦争の構図などについて諸資料を整理することで効果的に活用したり，読み取ったり，まとめたりしている（技能）

・当時の状況を鑑みた上で，ベトナム戦争はどういった戦争であったかについて多面的・多角的に考察し，自己や仲間との対話を通じて未来への決意を表現することができる（思考・判断・表現）

③本時の展開

	学習活動及び内容	教科	評価の観点
導入	①『Fortunate Son』を聞く→ベトナム戦争への布石	アメリカ国内の厭戦気分に触れ，最後の課題へつなげる。	生徒の活動を観察
	【課題 1】 ベトナム戦争の経緯を図で表してみよう		
展開 1 （個人）	②資料を読み，既習内容と統合して，ベトナム戦争の経緯をワークシート（グラフィックオーガナイザー）にまとめる。	生徒の活動について指示し，支援する。	諸資料を元にして，ベトナム戦争についての可視化ができている。（技術）
（4 人班）	③完成したワークシートをお互いに検討し，工夫したところなどを交流する。	生徒の活動を指示し，支援する。	ベトナム戦争の経緯が適切に理解できている。（知識・理解）
展開 2 （4 人班）	【課題 2】 パフォーマンス課題：ベトナム戦争をジャーナリストの視点から振り返る		
	④写真や課題 1 で作成した資料を基に文章を作成する。	各班に写真を配布する。 課題について説明する。	ベトナム戦争の持つ意味を理解し，それを適切に表現できている（思考・判断・表現）
	⑤発表する。	発表者を指名する。	
	【課題 3　（宿題）】 政策としての『戦争』が容認できない理由を今回の授業を踏まえて述べよ		

（4）成果と課題

平成 15 年度の中学校教育課程実施状況調査の結果でも明らかにされているが，近現代の歴史学習の充実は社会科における大きな課題の一つである。この部分は現実社会に直結し，地理的分野や公民的分野の学習にも大きな関連性を持つ単元であるが，前述の通り複雑な内容に苦手意識を持ってしまう生徒も少なくない。よって本授業では徹底した「可視化」「思考の言語化」を意識させた。

成果としては，まず生徒の可能性を再認識できたことがある。授業者として資料を精選し，コメントしやすいようなものを選んだつもりではあったが，教科書では数行の記述しかなく，生徒たちの予備知識がほとんどないだろうと予測される単元だけに不安はぬぐえなかった。しかしながら，まさに協同する姿が各所で見られ，こちらが敷いたレールはなくとも生徒たちは自らで探求し，新たな知識を得，それを整理していくことができた。また，今回パフォーマンス課題の評価に関してはルーブリックをワークシート内に印刷し，生徒たちに評価を意識させながら取り組ませた。

今回は課題として写真からの情報読み取りに加え，自らの意見を交えてのエッセイ記述を行わせたが，右記のように多くの生徒が写真を自分なりに解釈し，それを用いて自らの意見を補強するという活動を行うことができた。この際大きな助けとなったのが，図書館部会にご用意いただいた資料である。望む情報の入手だけではなく，授業の雰囲気作りにも有効活用できる書籍は，今後とも積極的に活用していきたい。

②電子黒板の設定をよく読み、以下の書き出しに続く形でエッセイ（自由な形式で、自分の考えや想いを表現する文章）を書いてみよう。

長きにわたるベトナムでの戦争を終え、私が今思うのは、
この戦争とは…
お偉いさん方のお遊戯であったということだ。
そう思うのは、各国の政府は必死に自分の主義を貫くために戦争をしようとしているが、どうの国民は戦争に積極的ではないと感じたからである。ベトナムの国民は、兵士が銃を構えている横で呑気通りに農業をしたりする等の生活をおくっていて、果てにはベトナムの女性兵士が談笑している様子すらあった。これは、戦場の国民でさえも戦争に対する興味がうすかったのだという証明だと言えよう。また、戦争をしかけたアメリカではベトナム戦争に反対するデモやアメリカ兵士が「戦争は地獄だ」とかかれたヘルメットをかぶっていたりした。普通、戦争をしかけた国（それも戦場が自国でない）は戦争を国民が抑制するようなものだと思うが、戦争をしかけたアメリカでさえも国民は戦争に反対する意志を示していた。これより、ベトナム戦争は国民に望まれて起こった戦争ではなく、政府のお偉いさん方が自分のわがままを貫こうとして起こった「お遊戯遊び」だったと言うことができると思う。

※課題②の評価
- 写真や史資料などから読み取ったことをまとめて記述できており、さらに自分の考察を適切に表現できている：A
- 写真や史資料などから読み取ったことをまとめて記述できている：B

課題点としては，この学習から得ることのできた「教科を超えた永続的な理解」を生徒たちにどれほど意識させられたか，が挙げられる。今回の授業では宿題とした課題 3 が授業者の設定した永続的な理解に繋がる点である。この部分に関しては生徒たちがこれまでの学習を踏まえ，自らの思考を中心に記述させることを重要視しようと思っていたが，感情論のみに流れてしまったものが多く見られた。あくまで社会科の授業であるという前提の元，既習事項をいかに生徒自身が咀嚼し，表現するか，またそれを教員がいかに読み取るか，という点が重要になる。国が重要な教育施策の一つに掲げる国際バカロレア教育でも，Statement of inquiry と呼ばれる教科の枠組みを超えて転用可能な概念の習得が目的の一つとされている。今後も社会科「を」教えることのみならず，社会科「で」何を教えるかを意識した授業を展開していきたい。

【実践事例 2】歴史的分野

（1）題材

「近世の日本」中世から近世へ

～キリスト教の世界とイスラム教の世界～

（2）単元の目標

戦国の動乱，ヨーロッパ人の来航の背景とその影響，織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係，武将や豪商などの生活文化の展開などを通して，近世社会の基礎がつくられていったことを理解する。

（3）学習内容

現代社会の大きな特徴の一つは「グローバル化」といわれるように，世界が一つになっているということである。この「世界が一つになる」という動きは，16 世紀にヨーロッパ人が中心となってはじまった。いわゆる大航海時代である。ヨーロッパ人を突き動かしたのは，イスラム世界に対抗して，キリスト教を世界に広めたいという願望と，香辛料などの魅力的なアジアの商品の貿易で大きな利益を得たいという欲望の 2 つであった。そして，その過程で日本へたどり着いたのである。

16 世紀の日本は，戦国の争乱を経て，織田・豊臣による天下統一がなり，検地や刀狩りといった諸政策を通して安定した社会が形成されていった時代である。この日本の社会に大きな影響を与えたのが，キリスト教と鉄砲の伝来である。

このように，この単元ではこれまでの日本中心の歴史学習から，世界的な動きの中での日本の歴史学習へとより広い視野で物事をとらえることが求められている。つまり，中学校社会科の目標にある「広い視野に立って，社会に対する関心を高め，諸資料に基づいて多面的・多角的に考察する」という能力を育てることができる単元である。以下は実践の学習指導案である。

①評価規準表

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
近世の歴史的事象に対する関心を高め，意欲的に追及し，近世の特色をつかもうとしている。	近世の歴史的事象について多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。	近世の歴史的事象に関するさまざまな諸資料から有用な情報を適切に選択したり，読み取ったり，まとめたりしている。	近世社会の基礎がつくられていったことを理解し，その知識を身につけている。

②本時の目標

・当時の状況や活版印刷術の特徴などをふまえ，宗教改革にもたらした影響について多面的・多角的に考察し，そのことを表現している。（思考・判断・表現）

・十字軍の遠征がローマ教皇や教会の権威のおとろえをまねき，宗教改革につながったことやイスラム圏との交流につながったことを理解し，その知識を身につけている。（知識・理解）

③本時の展開

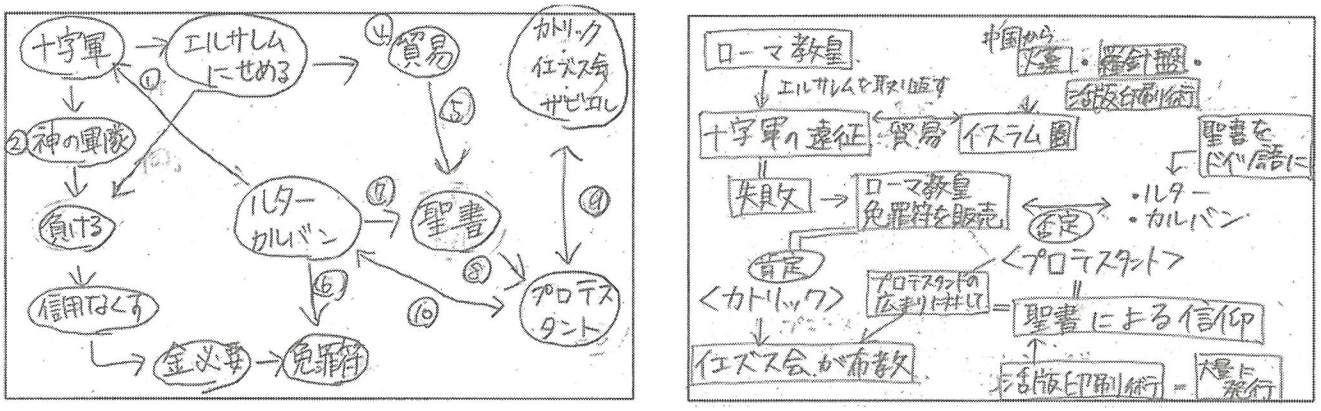
学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導　入 (3分)	・「長篠の戦い」と「十字軍の戦い」の絵をみる。	・2つの戦いが関係することを示唆し，これからの学習に関心を持たせる。	
展　開 (15分)	・十字軍の遠征の影響について学ぶ 十字軍，免罪符，宗教改革， イスラム圏との交流，三大技術（火薬・羅針盤・活版印刷術）	・ワークシートの空らんを埋めながら，キーワードをおさえていく。	
(4人班) (10分)	【課題1】活版印刷の技術は宗教改革にどのような影響をあたえたか。		
	・4人班で考察する。 ・手書きの書き写しより安価で大量に生産することができた。 ・ラテン語に翻訳された聖書を手に入れることができた。 →プロテスタントの拡大 ・全体で共有	・必要に応じてヒントをあたえる。 ヒント ①ヨーロッパで最初の活版印刷書籍は「聖書」であった。 ②それまでは手書きで書き写していたので，高価で貴重なものであった。	・活版印刷術の特徴などをふまえ，宗教改革にもたらした影響について多面的・多角的に考察し，そのことを表現している。（思考・判断・表現）
	【課題2】十字軍の遠征の影響をまとめよう。		
(12分) (5分)	・影響を図式化と説明でまとめる。 ・2人組で交流	・記号や数字を使い，わかりやすくまとめるよう促す。 ・加筆は色ペンでおこなわせる。	・十字軍の遠征が宗教改革やイスラム圏との交流につながったことを理解し，その知識を身につけている。（知識・理解）
まとめ (5分)	・全体で共有		

（4）成果と課題

歴史を学習する上で，事象のつながりや時の流れをつかむことは大切である。この授業では，図式化によって今までの学習内容を整理させるとともにそれらの能力を高めることに重きを置いた。図式は重要語句を暗記しているだけでは形にならない。それぞれの内容やつながりをしっかりと理解することではじめて形を成すことができる。また，ある歴史的事象を自らの言葉で説明する上で，内容を整理し理解することは欠かせない。その点で図式化は非常に効果的だと考えた。

成果としては，三つのことが挙げられる。第一に，生徒が重要語句のつながりをこれまで以上に意識しながら授業を受けていたことである。これまでは，無意識のうちに一つ一つの語句を別々に捉えてしまうことも多く，まとめの課題に対して原因や結果との関係性を捉えることができていない様子もみられた。今回は最初から図式化を強く意識していたため，その点が少し改善されたように感じる。第二に，生徒同士による共有のしやすさである。図式化されたものは文章よりも全体像が捉えやすく，他者との比較もやりやすく，自分に足りないものを補うには適していたように感じる。第三に，学習内容の生徒の理解度を教師側が視覚的に確認することができたことである。図式化されたものをみることで，その歴史的事象を生徒がどのように理解しているかをある程度測ることができたため，次回以降の授業改善や理解度が低い生徒への補てんに役立てることができた。

一方，課題としては，図式化したものを文章化するには至らなかったことである。歴史的事象を他者に自らの言葉で説明するには，文章化が必要である。論理的かつ端的にわかりやすく伝えることはコミュニケーションにおいても大切なことである。生徒が図式化することに慣れてくれば，次の段階はそれを文章化していく練習が必要である。



↑生徒のワークシート「十字軍の遠征の影響をまとめよう」の図式化の例

【実践事例 3】　歴史的分野～協同的な学びにおける思考力の育成～

（1）題材

古代国家の展開「京都の都と摂関政治」

（2）単元の目標

大陸の文物や制度を積極的に取入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇や貴族の政治が展開したことについて説明できる。

（3）学習内容

平成 20 年の中学校学習指導要領の改訂において，「我が国の歴史の大きな流れを理解する学習の一層の重視」「歴史について考察する力や説明する力の育成」が要点として挙げられた。これを受け，本時では，仲間との対話や議論を通して自らの思考を再構築していく中で，以下の 2 つの力の育成を図った。

まずは，「歴史の大きな流れを理解する力」である。桓武天皇が目指した政治について考察する活動を通して，「律令国家の成立（奈良時代）」から「律令国家の立て直し（平安時代初期）」，そして「摂関政治（平安時代中期）」へと時代が移り変わっていったことを理解させた。また，その際，小学校での学習の単なる繰り返しにならないよう留意した。

次に，「歴史について考察する力や説明する力」である。天皇中心の中央集権国家の支配体制について自身の考えをまとめる際に，「荘園の増加」「藤原氏の成長」「律令政治のあきらめ」などの諸資料から根拠を見出させ，事象間に関連性・つながりを持たせることで，論理立った説明ができるように留意した。さらに，「藤原氏の政治の特色」と「土地制度」など複数の視点に気付かせることによって，多面的・多角的に考察する力の育成をめざした。

また，指導と評価の一体化をめざし，ルーブリックを作成して授業実践を行った。以下は，その学習指導案である。

①単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
律令国家の確立と天皇や貴族の政治の展開，国際的な要素をもった文化と文化の国風化など，古代の歴史的事象に対する関心を高め，意欲的に追求し，古代の特色を捉えようとしている。	律令国家の成立に至るまでの過程，摂関政治，仏教の伝来とその影響，仮名文字の成立などについて多面的・多角的に考察し，その結果や過程を適切に表現している。	律令国家の成立に至るまでの過程，摂関政治，仏教の伝来とその影響，仮名文字の成立などに関する様々な資料を収集し，有用な情報を適切に選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。	大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇や貴族の政治が展開したこと，国際的な要素をもった文化が栄え，後に文化の国風化が進んだことを理解し，その知識を身に付けている。

②本時の目標

・桓武天皇がおこなった具体事例から，どのような政治を目指したのか説明することができる。（社会的事象についての知識・理解）

・天皇を中心とした中央集権国家の支配体制がくずれていった原因について，藤原氏の政治と土地制度の視点から多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現することができる。（社会的な思考・判断・表現）

③本時の展開

過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 (5分)	・平城京と平安京の写真を見比べ，気付いたことを発表する。	・平安京には寺院がないことに気付かせる。	
展開 (43分)	・桓武天皇がおこなったことを確認する。 （・平安京遷都 ・国司の不正の取り締まり ・税や労役の軽減 ・征夷大将軍の任命）	・奈良時代の律令政治や土地制度などの既習事項とつなげる。 ・平安京の地理的条件についても気付かせる。	
4人班	・課題1について考える。 桓武天皇は，何を目指したのだろうか。 〈予想される反応〉 ◇仏教勢力の排除。 ◇律令政治の立て直し。	・桓武天皇のおこなったことから考察させる。 ・机間指導をおこない，考えのまとまらない生徒には教科書の該当箇所を参考にするよう指導する。	・桓武天皇がおこなった具体事例から，どのような政治を目指したのか説明している。 （知識・理解）
コの字	・課題1について交流する。 ・藤原氏の摂関政治について確認する。 ・天皇を中心とした中央集権国家の支配体制がくずれていったことを確認する。	・小学校での学習の単なる繰り返しにならないようにする。	
4人班	・課題2について考える。 天皇を中心とした中央集権国家の支配体制は，なぜくずれていったのだろうか。 〈予想される反応〉 ◇藤原氏が摂関政治をおこなったから。 ◇地方の行政を国司にまかせたから。 ◇墾田永年私財法を出したから。	・「荘園の増加」「藤原氏の成長」「律令政治のあきらめ」などの諸資料を根拠に思考するよう促す。 ・机間指導をおこない，考えのまとまらない生徒には教科書の該当箇所を参考にするよう指	・天皇を中心とした中央集権国家の支配体制がくずれていった原因について，藤原氏の政治と土地制度などの視点から多面的・多角的

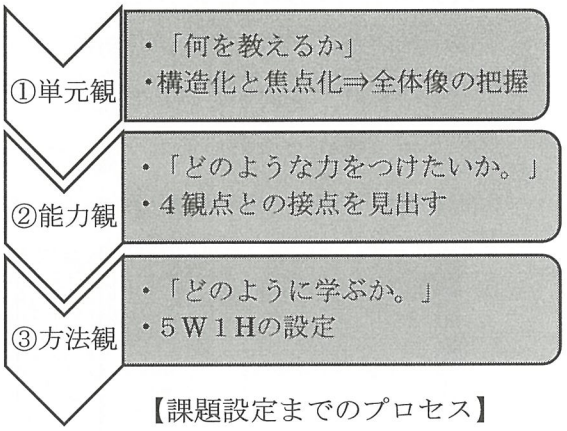
コの字	◇遷都と東北地方進出をしたから。 ・課題２について交流する。 ・課題２について個人でまとめる。	導する。 ・「藤原氏の政治」「土地制度」の視点があることに気付かせる。	に考察し，その結果を適切に表現している。 （思考・判断・表現）
まとめ （2分）	・本時についてまとめる。	・「貴族」「荘園」「律令国家の崩壊」をキーワードとして，既習事項や次回以降の学習につながりを持たせる。	

④課題２のルーブリック

A　原因 ↗　↖ 視点①　⇔　視点②	天皇を中心とした中央集権国家の支配体制がくずれていった原因について，藤原氏の政治と土地制度の視点同士を関連付けて多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現している。
B　原因 ↗　↖ 視点①　視点②	天皇を中心とした中央集権国家の支配体制がくずれていった原因について，藤原氏の政治と土地制度の視点から多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現している。

（４）成果と課題

今回の実践を通して見えてきたことは，「課題設定までのプロセス」である。今回，課題１が抽象的で曖昧であったため，何をどう考えていけばよいのかわからない生徒が見られた。一方，課題２は深く考察している生徒が多く見られた。これを受け，さらに研究協議での反省を踏まえて，右図のような「単元観」「能力観」「方法観」による課題設定までのプロセスを作成した。



【課題設定までのプロセス】

まず，課題を設定する際には，単元全体を見通す必要がある。そこで，構造化と焦点化を行い，単元という全体像から何を教えるかを決める。そして，OECDにおけるキーコンピテンシーの概念にのっとり，どのような力をつけたいかを明らかにする。その際，構造化・焦点化した内容を社会科の４つの観点である「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断・表現」「資料活用の技能」「社会的事象についての知識・理解」に当てはめていく。最後に，内容と能力の合致した部分を５Ｗ１Ｈと照らし合わせる。ただし，協同的な学びでは，50分の授業内で共有の課題とジャンプの課題を設定するため，難易度の設定についても考慮する必要がある。このように，課題を設定する際には上記のようなプロセスを踏むことにより，深い対話が繰り広げられるよりよい課題を設定していくことが出来ると考える。

【実践事例 4】～協同的な学びにおける ICT 機器の活用～

文部科学省の「学びのイノベーション事業実証研究報告書」（平成 26 年）において，『ICT は，時間的・空間的制約を超えること，双方向性を有すること，カスタマイズが容易であること，多様かつ大量の情報の蓄積・共有・分析が可能であることなどがその特長』とされた。このことから，授業における ICT の利点は「即時性」「共有性」「保存性」だといえる。そこで，これらの利点を生かした授業実践を試みた。なお，以下は教材研究において ICT 機器の使用が効果的だと考えた場面での実践である。

①導入における ICT 機器の使用～「即時性」の活用～

題材：　第二次世界大戦と日本「戦時下の国民の生活」
　　室町幕府と下剋上「産業の発展と都市と村」

ねらい：知的好奇心を引き出す。

内容：

授業の最初の７分間は，どんなことをするのかを楽しみにして，生徒の目が輝きに満ちている。そこで，ICT 機器のアニメーションの「即時性」を利用して，２つのパターンの導入を行った。

１つ目は，隠していた部分を映し出していく方法である。クイズ形式で現在の平均寿命と 1945 年の平均寿命を提示した後，男と女という語句をヒントとして提示し，当時の国民の生活がいかに苦しいものであったかを気付かせた。【図１】

２つ目は，資料から読み取らせていく方法である。中世の稲作の絵を見て気付いたことを挙げさせ，男性が牛馬を使って耕していることや女性が五月傘をつけて苗を植えていること，音楽を奏でて舞う田楽が行われるようになったことに気付かせた。【図２】

【図１】

【図２】

成果と課題：

１つ目については，板書で行った場合との比較を行った。２つ目については，教科書を用いて行った場合との比較を行った。共通して見られたのは，その後の授業に対する意欲の違いである。集中力，意欲が ICT 機器を活用したときの方が大きく，特に２つ目においては生徒の反応に大きな違いが見られた。このことから，ICT 機器を用いた導入は生徒の興味・関心を引き出すのに効果的であることが分かった。

②調査活動におけるICT機器の使用　～「即時性」「保存性」の活用～

題材：　国民生活と福祉「少子高齢化と財政」

ねらい：必要となる情報を即時に調べ，考えの根拠を見つける。

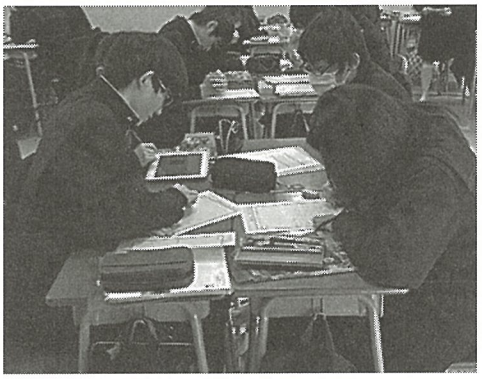
内容：

ICT 機器の特長の「多様かつ大量の情報の蓄積・共有・分析が可能であること」を生かし，情報収集活動を行った。導入の後に「今後の政府は大きな政府か小さな政府のどちらであるべきか」という課題を提示し，立場を明らかにさせた上で，考える視点（①社会保障②市場③税）を明示した。その後，１人１台ずつタブレット端末を配布し，根拠となる資料を収集させつつ自分の考えを構築させた。その際，情報の信憑性についても意識して意見を構築できるように，参考にした資料を参考文献として明記し，かつデータとして保存しておくことも指導した。

成果と課題：

タブレット端末のみを根拠とさせた場合と，教科書のみを根拠とさせた場合を比較すると，大きな違いが見られた。タブレット端末のみの場合，ネットサーフィンを続ける生徒や，すでに学習した内容にばかり目が行っている生徒が複数見られた。これに対し，教科書のみの場合は前後のページをめくって懸命に根拠を探す生徒が多かったが，意見の広がりがない生徒も少し見られた。このことから，協同的な学びにおいて調査活動を行う場合は，ツールとしてICT機器を使うことにとどまらせることが大切であると考えられる。そうすることで，教科書にとらわれない，幅広い意見の構築を図ることができると考える。

また，タブレット端末を１人１台配布する場合と，４人班に１台配布する場合についても比較を行った。１人１台の場合，真剣に作業に取り組むが，そのうち何人かは全く関係のないことをしていた。これに対し，班に１台の場合，班で協力して取り組む【図３】が，１台しかないタブレット端末を自分のものとして取り扱う生徒が見られた。このことから，調べ学習など協同して取り組ませたいときは班に１台，個人の考えを構築させたい場合は１人１台というように，目的に応じて配付する数を調節していく必要がある。いずれにしても，機器の扱い方の指導や関係のないことをさせないよう机間指導を行う必要はあると考えられる。



【図３】

③発表や話し合いにおけるICT機器の使用～「共有性」「即時性」の活用～

題材：　中世から近世へ「ヨーロッパ人の来航と信長」

ねらい：多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現する。

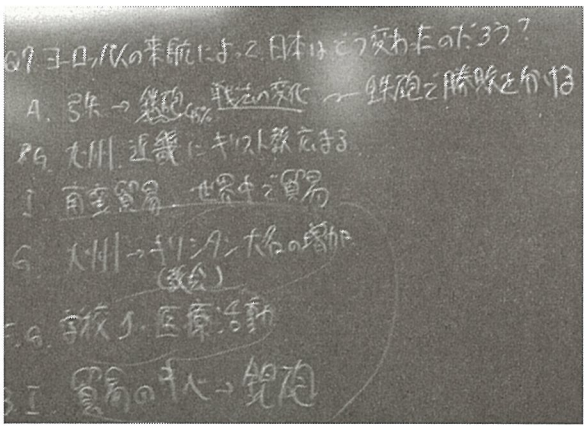
内容：

ICT機器の持つ「共有性」「即時性」を活用して，それぞれの意見・考えを全体で共有した。「ヨーロッパ人の来航によって日本はどう変わったのだろうか」という課題に対し，各々が考えたことを４人班で交流させた。その後，OHC（Over Head Camera）を用いて，生徒が考え

の根拠とした資料を拡大して電子黒板に投影し，共有を図った。また，その場で説明しながら書きこませることで，ICT 機器の「即時性」を利用した。

成果と課題：

板書で意見を集約した場合【図４】との比較を行った。板書の場合は，他者の意見をメモする生徒が多くみられたが，内容を抑えることに捉われて資料にまで目をやれていない生徒もいた。それに対し，OHC を使用した場合は，資料に気付いたことを書きこむ生徒が多く見受けられたが，理解力に差があることが分かった。このことから，共有する場面では板書と ICT 機器の併用が効果的だと考えられる。即時に生徒の意見を映し出すことのできる点で ICT 機器は優れているが，画面が切り替わることで残らないというデメリットがある。一方，板書は書いた文字が残り意見の整理がしやすいが，時間がかかり資料に目を向けにくいというデメリットがある。したがって，双方のデメリットをメリットに変えるために，生徒が根拠とした資料を ICT 機器で投影しつつ，板書を行うことが多面的・多角的に考察することにつながると考える。



【図４】

④評価における ICT 機器の使用～「共有性」「保存性」の活用～

題材：　国民生活と福祉「少子高齢化と財政」

ねらい：社会的な思考・判断・表現を評価する。

内容：

事例②で行った内容について，ICT 機器の持つ「保存性」を活用して，評価を行った。根拠を調べる際に使用した資料を共有ファイル内に保存させておき，提出したワークシートの内容と資料を比較しながら，その考えに根拠があり，適切に表現できているかを評価した。【図５】その際，資料を見てその資料の信憑性についても吟味した。

A…政府・市場・国民の関係を踏まえ，根拠を持って多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現している。
B…根拠を持って多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現している。

【図５】

成果と課題：

ファイル名に出席番号と名前を入れさせておくことで，スムーズにワークシートと比較することができた。また，ワークシートのみで評価するのとは違い，何をもとにして考えたかが明確で評価を行いやすく感じた。しかし，ネットの投稿や意見をそのまま引用している生徒も見られた。このため，ネットに依存してしまわないよう注意させること，情報モラルを身に付けさせることは ICT 機器を使用させる上で必要不可欠であると考える。

3．成果と課題

上述したように，いわゆるパフォーマンス課題を設定し生徒に提示することで，生徒たちは学習について能動的になる。もちろん，受動的であれば課題のクリアができないので，いきおい生徒たちは意識的に学習活動に挑戦するが，これをさらに深化・細分化させることで学習意欲の低い生徒への授業参加を促す効果もあるのではないか，と改めて気付かされたことが成果の一つとして挙げられる。全ての教育現場に還元できるような教育システムの構築は，我々の使命でもある。今後ともどの学校現場であっても実践可能な授業を研究していきたい。

来年度以降の研究テーマは「つなぐ力」と現時点で設定されている。社会科として，地理・歴史・公民の各分野を「つなぐ」，現代日本を諸外国，過去そして未来に「つなぐ」，そして社会科の学習にとどまらない，生涯にわたって活用できる学力を生徒たちに育ませ，新たな世界と彼らを「つなぐ」ことが求められてくるのだろうと我々は認識している。